



## 史跡 浜川ウガン遺跡

浜川ウガン遺跡は石灰岩丘陵からなっている。『琉球国由来記』に「島森ヨリアゲノ嶽・神名イシノ御イベ」という記載がある。浜川ウガンのことと思われる。

同場所南斜面から、8～10世紀の「くびれ平底土器」や貝殻が採集されるが、その周辺には先人たちの生活址は発見されない。

このことから、石灰岩丘陵上に祭祀を執り行う場所だった可能性が高い。初期農耕の祭祀遺跡と考えられ、類例遺跡として伊是名島アギギタラ貝塚がある。

丘陵の中腹に琉球石灰岩を利用した拝所が設けられ、3つの香炉が安置されている。以前は、この拝所で浜川集落の人々により、2月にシマクサラサー、3月にはカミウシミーがおこなわれたという。シマクサラサーでは屠殺解体された豚の骨片や肉を供えて悪霊払いや、豊作を祈願したという。現在では、3月のカミウシミーの際に、シマクサラサーもおこなっている。

浜川ウガン遺跡の正面左手にはアコウ（ウスクガジュマル：クワ科イチジク属）がある。樹高9m、胸高周囲10.4m、樹冠20×24m（480㎡）を誇っている。樹齢は150～200年と推察され、町内で最も古い木である。

同石灰岩丘陵は地質学的にも重要な場所である。本町や沖縄市からうるま市には、隆起した石灰岩の岩山が飛び石上に点在する。これらの丘陵は沖縄本島を南北に区分する地質の境目になっている。丘陵の北側を国頭マージ、南側を島尻マージと呼び、双方には植生の相違の目安にもなっている。沖縄本島の地質学や植生を研究する上でも貴重な場所である。